

母校人物群像Ⅲ

昭和期



※掲載人物は編集委員会が選択し、執筆・編集しました。

昭和十四年「鶏騒動」で芥川賞受賞

半田 義之

(明治四十四～昭和四十五)

一九二一～一九七〇

横浜生まれ。四年生の時に思想事件で学校を追われたという。鉄道学校を経て国鉄職員となり、作家を志し、日本映画記者となり創作に専念。保高徳蔵の「文芸首都」の会員となり、『文芸首都』（一九三九年）掲載の『鶏騒動』が芥川賞受賞。戦後は「新日本文学」退会后、日本民主主義文学同盟設立に尽力。『国鉄幹線』（一九五六年）が代表作。

(大正十三年入学、四年次に退学)

民俗学者

今井 善一郎

(明治四十二～昭和五十一)

一九〇九～一九七六

昭和時代の民俗学研究者。明治四十二年勢多郡北橘村（現渋谷区）生まれ。柳田国男の影響を受け、昭和二十一年上野勇らと上毛民俗の会を結成。郷里群馬県の民俗学の確立につくした。また、地元北橘村議会議長も務めた。慶大卒。著作に「習俗歳時記」「赤城の神」など。

(昭和二年卒)

元トヨタ自動車(株)会長

斎藤 尚一

(明治四十二～昭和五十六)

一九〇九～一九八二

東北帝国大工学部卒。昭和十年、トヨタの前身となる豊田自動織機製作所に学士一号として入社した。製造現場の最前線に立ち、「改善（カイゼン）」「ジャストインタイム」に代表されるトヨタ独特の生産方式の確立に尽力した。

大学時代の恩師が自動車部設立の中心となった豊田喜一郎（第二代社長）の友人だったこともあり、入社早々から喜一郎の命令で工場建設、技術開発に携わった。二十五年、分離されたトヨタ自工で取締役製造長、常務取締役になり、製造部門を統括。同年の米・フォード社の工場視察からの

帰国後、「自動車の国アメリカ」を出版した。専務取締役時代の三十五年、品質管理委員会の委員長となり、品質管理体制の整備に尽力。取締役副社長を経て五十一年、取締役会長に就任。五十六年十月三十日死去。享年七十三歳。トヨタの五十年史「創造かぎりなく」は次のように斎藤の死去を悼んでいる。「名実ともに技術の最高責任者として技術開発に努め、経営の近代化、合理化、さらには健全な労使関係の確立に手腕を発揮した。トヨタ発展の基礎となった『創意くふう提案制度』を導入し、強靱な企業体質の確立に大きく寄与した」

(昭和二年卒)

磁気記録媒体シンクロリーダー発明

星野の 愷

(明治四十二〜一九〇九)

昭和九年東京工業大学電気化学科卒。五十三年同大教授(電子物性学講座担当)。五十七年シンクロリーダーを発明し、世界的に有名になる。次いで、シンクロファックスを発明。

(昭和二年卒)

元衆議院議員、日本眼科医会会長

羽生田 進

(明治四十三〜平成十一)

一九一〇〜一九九九
慶応大学医学部卒。昭和十一年衛生部見習士官。

二・二六事件では反乱軍側で首相官邸に突入。負傷者看護従事によって軍法会議で不起訴となる。中支戦線で陸軍軍医中尉として終戦を迎える。四十六年復員、前橋で眼科医を開業。前橋医師会長、対ガン協会長、群馬県医師会会長を歴任。昭和四十七年年総選挙で藤枝泉介の後継者として自民党から立候補、当選。二期七年、文教・社労委員会で活躍。昭和五十三年十二月から一年間大平内閣の科学技術政務次官を務める。

「昭二十四年四月から五十四年十月に辞任するまで前高の校医であった。私は母校の後輩たちの心と体の健康を考え、集団赤城登山を提案し、往復徒歩で登山を実行させた。PTAが心配したのでジープを提供して内科校医、看護婦を乗せて後続させ、私自身は生徒と一緒に歩いて参加した。年中行事としてずっと挙行していたが現在では中止してしまったらしいので、私は再度提案する。

衆議院議員時代の置き土産は新前橋駅から前橋駅東方天川陸橋の間約二キロの両毛線高架化と前橋駅南口を開いたことである。」(前橋高校百二十年記念文集より)

(昭和三年卒)

元日本薬理学会長、国際薬理学連合会副会長

細谷 英吉

(明治四十三〜一九一〇)

慶応大学医学部薬理学教室卒。昭和三十七年教授。昭和四十九年四十一年間勤めた慶應大学を退職。カネボウ薬品(株)の専務取締役となる。麻薬依

存の研究、ラットによる依存試験法は「細谷法」として国際的に知られる。『人と麻薬』で医博。日本薬理学会長、国際薬理学連合会副頭取。

「厳寒時にも教室には一切火の気がなかった。冬の朝の体操、寒稽古、映画館出入禁止、武装行軍、等々今になって考えるとよく辛抱したものだと思う。われることが沢山あるが、当時はそれが殆ど苦にならなかった。私は先年ミシガン大学に二年ほど在職したが、その間言葉にたいした不自由しないで過ごしたのは、前中時代に New Crown Reader で仕込んで下さった村山義輝先生の御蔭である。先生には今もなお深く感謝申し上げている。」(前橋高校八十七年史より) (昭和三年卒)

中国思想家 元二松学舎大学長

浦野 匡彦

本文30頁参照。

(昭和四年卒)

小野里工業(株)会長 元同窓会長 現顧問

小野里 光明

(明治四十四年〜一九一)

早稲田高等工学校卒業後、昭和六年に家業の建設業に従事。第二次大戦復員後は、専務として社業に励む傍ら、前橋市議会議員、協同組合前橋乾燥場理事長など広く郷土発展のために尽力する。昭和三十一年一月小野里工業株式会社社長に就任

し、県建設業界のリーダー会社に育てる。長く母校の同窓会会長職を務め、会活動の活性化を促した。豪放磊落な性格で知られる。柔道は七段。

(昭和四年卒)

日本料理「近茶流」宗家

柳原(高橋)敏雄

旧姓高橋。割烹旅館等を経営しながら日本料理の研究に取り組み、その存在を知られるようになる。NHKの人気番組「今日の料理」の名物先生だった。テレビに出演する一方、全国を歩いて各地に伝わる料理の研究を行った。『伝承日本料理』『味をたずねて』『魚介歳時記』など著書多数。江戸懐石近茶流を興す。

(昭和四年卒)

「冬の神」で芥川賞候補

森田素夫

(明治四十四〜昭和三十六)

一九一〇〜一九六二

旧伊香保町(現渋川市)の温泉旅館に生まれる。早稲田大学文学部英文科を卒業。「女中の四季」、「女中部屋」など温泉旅館に題材を得た作品が多い。昭和十七年上半年の芥川賞に「冬の神」がノミネートされたが受賞には至らなかった。このときには「李陵/山月記」などで有名な中島敦が「光と風と夢」で一緒にノミネートされている。昭和

三十年に「暗い眼窩」で文学賞を受けている。

(昭和五年準卒)

元高分子学会長

岩倉義男

(大正五〜平成十四/一九一六〜二〇〇二)
旧桐生高専卒業後二年間民間企業に勤務する。その後東京工業大学染料化学科に入学し、卒業後は東京工業大学助手となる。昭和三十年二月に同大教授となったが、昭和三十七年には東京大学工学部教授に転じる。重付加系高分子化合物の合成研究で注目された。ポリウレタンの合成に世界で初めて成功し、わが国合成高分子分野の第一人者といわれた。反応性高分子及び耐熱性高分子分野でも先導者として多くの業績を上げた。日本科学会賞受賞。高分子学会会長などを歴任する。旧新町(現高崎市)出身の作家、金鶴永は東大時代の教え子の一人。

「前橋中学での化学の手解きは、昭和のはじめ相馬先生(北大出身)からであり、化学実験の面白さも教えて戴き、ついで大越先生(蔵前高工出身)に有機化学の授業の中でその面白さに関心を持たせて戴いた。

今日ウレタンフォームなどでお馴染みのポリウレタンというポリマーを日本で初めて合成したので私であつて東工大卒業の翌年の東工大助手時代の事であつた。」(前橋高校百二十年記念文集より)

(昭和六年卒)

元東南アジア史学会長 東京外大名誉教授

河部利夫

(大正三〜/一九一四)

東北帝国大学西洋史学科卒。助手となる。日タイ交換学徒として東南アジア史を研究。昭和二十二年東京外事専門学校(昭和二十四年年東京外国語大学)勤務。「華僑の研究」で文学博士。東南アジア史学会長。

昭和五十二年退官まで同大アジア・アフリカ言語文化研究所教授。著書に『東南アジアの価値体系』『東南アジア社会文化事典』『東南アジア』など。

(昭和七年卒)

元前橋市長

藤井精一

(大正三〜昭和六十三)

一九一四〜一九八八

前橋市長。小千谷中学卒業で、本校在籍経験あり。前橋市の助役などを歴任し、昭和五十三年、石井繁丸の後を受けて十四代前橋市長に初当選、三期の途中で逝去。在職中の昭和五十四年、危険性が指摘されていたインフルエンザワクチンの集団接種の中止を決断し、医学関係者などから高い評価を受けた。

(昭和七年縁故)

海軍特殊潜航艇指揮官

岩佐直治

（大正四〇昭和十六〇一九一五〇一九四二）
一九一五年（大正四年）生まれ。前橋市天川原出身。前中卒業後、海軍兵学校に進み「比叡」、「鹿島」などの軍艦に乗り組む。その後昭和十五年暮



天覧授業

昭和9年11月15日。谷口弥寿雄教諭による4年生の図画の授業風景。

れ頃から特殊潜航艇搭乗員としての訓練を受ける。昭和十六年十二月八日の日米開戦の折、ハワイ真珠湾に侵入し米国海軍艦隊の攻撃を企図したが、真珠湾を航行中に発見されて艦船に激突され、さらに爆雷攻撃を受けて果たせなかったと言われる。享年二十六歳。武勇を讃えられ、大尉から二階級特進し、中佐となる。軍神として敬われた。

（昭和八年卒）

社会学者 元群大教授

小池善吉

（大正四〇平成十三〇一九一五〇二〇〇一）
群馬大学教授、社会学・歴史学者。中之条町出身、本校から旧制新潟高校、東京帝国大学文学部社会学科へ進む。戦後、群馬青年師範学校教授、群馬大学教養学部教授となり、退官後上武大学教授などを務める。この間中之条町誌編さん委員長として全四巻の刊行を成し遂げ、さらに群馬県史編さんに携わり、近代現代史部会の部会長として活躍。主著は退官記念出版の『群馬の村落構造』、他に『近代群馬農村の危機的展開』などがある。

（昭和八年卒）

スズラン百貨店創業者

渋沢康平

（大正四〇一九一五〇）

地方百貨店の雄、スズランの実質的な創業者。

昭和二十七年、(有)スズラン衣料品店の創業に参加。その後経営を取り切り、前橋、高崎に大型店舗を構えるようになった。シベリア抑留体験がある。熱心な観音経信者としても知られる。

（昭和八年卒）

心理学者 元法政大教授

著書「産業心理の理論と技術」

中島義行

（大正四〇一九一五〇）
東大文学部心理学科卒後、昭和二十七年群大教授、昭和三十九年法政大教授、昭和五十三年工学部長となる。主な著書に『産業心理の理論と技術』がある。昭和五十八年五月、本校生徒へ向けて「性格テストの話」と題して講演した。

（昭和八年卒）

「乾坤独算民」で直木賞候補

浅田晃彦

（大正四〇平成八〇一九一五〇一九九六）
大正四年富士見村出身。慶応大医学部卒。軍医・開業医・船医・鉄道診療医を務める傍ら執筆行に。「マラリア戦記」で鉄道ベンクラブ賞。

「入学すると先ず敬礼を励行させられた。先生にはもちろん上級生にも軍隊式の拳注目目の礼をしなければならぬ。松下校長はスポーツに熱心

だった。東洋大学から小西先生を迎えたのは庭球部を強くするためだった。たちまち深町・沼田のコンビが養成され、県下に敵無しとなった。東大から招いた野村先生がラグビー部をつくった。県下で最初である。タックルする形相はこちらへ飛びかかって来そうで怖かった。しかし小野里・今井らの猛者は練習に熱中していた。怖いので顔が会うと丁寧に敬礼したものである。」(前橋高校百二十年記念文集より)

(昭和九年卒)

元群馬県知事

清水一郎

(大正七〇/平成三〇/一九一八〇/一九九二)

前橋市出身。福島高商(現福島大学経済学部)卒。日立製作所勤務後教職へ、後実業界に転じ、群馬ロイヤルホテル等を設立。前橋市議、群馬県議を経て、昭和五十一年群馬県知事に当選。連続四期。五十八年あかぎ国体開催。平成元年勲二等旭日重光章受章。

(昭和十一年卒)

元中沢ヴィレッジ社長

中沢清

(大正七〇/一九一八〇)

草津町出身。YMCA国際ホテル卒。箱根富士屋ホテル勤務を経て実家である大阪屋旅館社長に。大阪屋不動産、中沢ヴィレッジを設立。草津町議を経て昭和四十年に草津町長当選。

洋画家

島岡實

(大正八〇/一九一九〇)

前橋市出身。帝国美術学校(現武蔵野美術大)西洋学科卒。二紀会展で二紀賞・同人賞を受賞し審査員となる。著書に「デッサンの描き方」、「風景画の描き方」などがある。

(昭和十二年卒)

元群大教授 元共愛学園学園長

徳江健

(大正八〇/平成十一〇/一九一九〇/一九九九〇)

中国大蓮出身。旧制水戸高校から東大法学部卒。教授を経て昭和五十六年群大教育学部長に。専門は政治学・政治史。六十年共愛学園長を経て共愛学園女子短期大学長、前橋国際大学長。主な著書に「自治体のしごと」、「事件と騒動・群馬民衆闘争史」。

(昭和十二年準卒)

元衆議院議員 元日本社会党委員長

田邊誠

(大正十一〇/一九二二〇)

前橋市出身。通信官吏練習所本科で学び郵便局員となる。全通労組・群馬地評の結成に参加、社会党前橋支部長となり、群馬県議を経て衆議院議

(昭和十一年卒)

員に。以来十一回当選。党国対委員長・書記長を経て、平成三年に委員長をなる。八年で引退し、同年勲一等旭日大綬章を受章。

「紅雲町校舎は思い出多いものですが、一年一学期限りでお別れしなければなりませんでした。



軍事教練 昭和15年

利根川を見られなくなることが無性に淋しい気がしてなりませんでしたが、すでに天川原に移転が決まっており、校舎新築は完成し、校庭の整地のみが残されていて夏休みにその整理に動員されたものでした。木の香も匂う新しい校舎は魅力的で、近くにある双子山古墳に寝転んでお喋りをして時間を忘れ田圃の畔を駆け足で始業時間に間に合ったりした日々を送りました。」（前橋高校百二十年記念文集より）

（昭和十四年卒）

柔道家 講道館十段位

安部一郎

本文20頁参照。

（昭和十六年卒）

刑法学者 元名古屋大学教授

大塚仁

（大正十二／一九二三）

法学者、専攻は刑法。群馬県勢多郡桂萱村（現前橋市）出身。団藤重光の指導を受ける。一九四八年高等文官試験司法科試験合格、一九四九年東大法学部助手、一九五二年名古屋大学法学部助教授、一九五九年同教授、一九六二年法学博士（東京大学）、学位論文は「間接正犯の研究」。一九七四年名古屋大学法学部長を経て名誉教授。

（昭和十六年卒）

数学者 米国ジョンスホプキンス大数学科教授

井草準一

（大正十三／一九二四）

昭和二十年東大理学部卒。昭和二十八年にアポロ計画の米国陸軍省の招へいでハーバード大へ。昭和三十年からジョンスホプキンス大の助教授、昭和三十六年から教授。

ジョンホプキンス大学数学教室と日本の数学との緊密な関係を発展させ、さらに日米の数学の研究交流を促進する貴重な国際交流の場である日米数学研究所を創設し、初代所長となった。

（昭和十六年準卒）

政治学者 横浜市立大名誉教授

今井清一

（大正十三／一九二四）

昭和後期／平成時代の政治史学者。大正十三年二月七日生まれ。妻は尾崎秀実の娘。丸山真男にまなび、昭和四十年横浜市立大教授、平成三年湘南国際女子短大教授。大正デモクラシーやファシズムを中心に近現代史を専攻。昭和三十年の遠山茂樹、藤原彰との共著「昭和史」は昭和史論争をおこした。東大卒。著作に「日本近代史」など。「私たちの学年は中学の受験勉強の最中に二・二六事件の朝の大雪を迎えた。二年生の時の七月には日中戦争がおこり、夏休みに入るまでに内藤先生や石淵先生が召集され、生徒控室で送別した記

憶がある。そんな時代だったから、個々の先生については別として、学校ではやたらとうるさくて、あまり愉快な思い出はない。四年の時には上履きも禁止されたので、冬休みまで靴下をはかず素足で突っ張っていたら見事に風邪をひいてしまった。その代わりになかなか楽しい友達つきあいがあった。このグループの交際は、メンバーの出入りはあるが今も続き、クラス会の幹事もその辺からでている。

話は別になるが、佐藤栄作内閣発足のころ、内山岩太郎神奈川県知事は紀元節復活論の旗振り役だった。私は横浜市大の教員だったが、朝日新聞の本社から百目鬼恭三郎君が訪ねてきて、それへの反論を頼まれたことがあったが、思えば三人とも前中出であった。」（前橋高校百二十年記念文集より）

（昭和十六年準卒）

俳優

小林桂樹

（大正十二／一九二三）

俳優。群馬県群馬郡室田町（現高崎市）出身。俳優歴六十年超。日活演技研究所の研究生から、一九四二年に『微笑の国』の工員役でデビュー。兵役を経て、一九五五年、群馬交響楽団をモデルにした『ここに泉あり』で毎日映画コンクール助演男優賞を受賞、一九五八年には出演百本記念映画として制作された『裸の大將』で天才画家・山下清を演じ、同映画コンクール主演男優賞。一九

六〇年、『黒い画集・あるサラリーマンの証言』ではギネマ旬報男優賞、ブルーリボン大衆賞、毎日映画コンクール主演男優賞。一九六三年、岡本喜八監督、山口瞳原作の『江分利満氏の優雅な生活』で、毎日映画コンクール主演男優賞、日本映画記者会賞最優秀男優賞を受賞するなど、名実共にトップスターとなった。映画化された小説『日本沈没』（小松左京）では、日本の危機を示唆し、次第に発狂する田所博士役、一九八四年には『ゴジラ』で三田村清輝内閣総理大臣役を演じた。現在も、テレビ朝日『牟田刑事官事件ファイル』の主演を勤めている。日大中退。

「中学二年の勉強はもろんのこと、体育特に陸上の選手であり、剣道はばぐんに強かった。要するに文武両道の模範生徒だったのである。校則で禁じられていた映画見物によく誘ったが断固拒否する小林桂樹に映画を見る代わりにと、兄から贈られた『エノケンの鞍馬天狗』の台本を渡した。後年小林が俳優となつてから「茂さん、あのときだよ。おれが映画界という未知の世界に憧れを持ち始めたのは。あの後、シナリオライターとか映画評論家とかの物書きになりたいと思い、結局は役者になつちまつたけれど、そもそののはじまりはあの『エノケンの鞍馬天狗』からなんだ」とうちあけ話してくれた。」（前橋高校百二十年記念文集昭和十六年卒 斉藤茂氏「級友・小林桂樹」より）

（昭和十六年準卒）

元朝日新聞編集委員 文芸評論家

どうめ ききょうざぶろう 百目鬼恭三郎

（大正十五〜平成三／一九二六〜一九九一）

旧制新潟高をへて東大文学部を卒業。前橋高校に昭和二十六年から英語教師を務めたが一年余りで退職、朝日新聞社に入社。文芸・文化評論に健筆をふるった。とりわけ昭和五十一年から昭和五十七年まで週刊文春に掲載した「風の書評」は一世を風靡した。「日本文学の虚像と実像」「奇談の時代」は日本エッセイストクラブ賞を受賞。等著作多数。（昭和十八年卒）

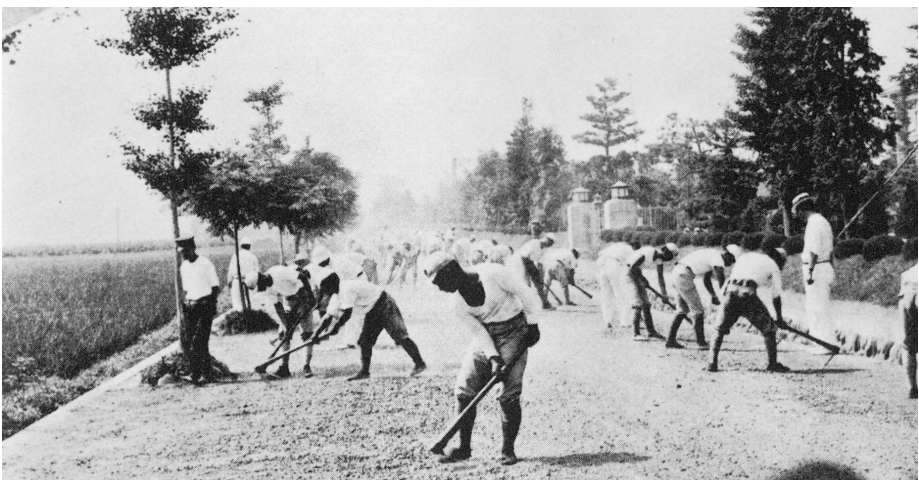
元衆議院議員、元総務庁長官

やまぐち つるお 山口鶴男

（大正十四〜一九二五）

吾妻郡草津町出身。桐生工専（現群馬大学工学部）卒業後、小学校教員になり、組合活動に従事。昭和三十五年の第二十九回総選挙に日本社会党公認で群馬三区から出馬、初当選した。再選を目指した三十八年の総選挙では落選の憂き目をみたが、四十二年に返り咲き、その後十回連続して当選。衆議院議員を通算で十一期務めた。平成八年、中選挙区から小選挙区への移行に伴い、次期総選挙に出馬せず政界を引退する意向を表明したが、十二年の総選挙に社会民主党公認で出馬、落選し、正式に引退した。

社会党内では国会対策委員長を経て、土井たか



生徒を動員しての正門前道路整備
この写真は、昭和14年10月発行の「坂東太郎」の表紙となった



前中野球部

前中グラウンドにて。紺の帽子とストッキング、ブロック体の胸文字、アンダーシャツは紺と白がまちまちであった。バックネット代わりに軍隊の擬装網を使った。

子委員長の下で書記長を四年半務めた。平成五年、細川護熙内閣で衆議院予算委員長に就任。翌六年、村山富一内閣で総務庁長官として初入閣した。八年、社会民主党に移り、同年四月勲一等旭日大綬章を受けた。社民党前議員会会長を務めている。

(昭和十八年卒)

教育心理学者

田村 鍾次郎

(昭和四〇／一九二九)

「入学直前の昭和十六年十二月に太平洋戦争に突入したので、入試の面接では真珠湾攻撃のことについての質問もあった。体力検査として百米走、立巾とび、鉄棒の懸垂の三つがあったのが強く印象に残っています。我々が在学していた時期は戦中戦後の混乱期とも言えます。思想的にも右から左へと降りまわされ、食糧は不足し、学力のレベルも低かったようです。ただ、そういう時代であっただけに、いや応無しに人間社会について考えさせられる機会は多かったように思います。特に、戦中あれだけ他国の批判をして他民族の欠点を取り上げていたのが、戦後ガラッと変わってしまったこと、そんな人の心のたよりなさに対する関心がやがて大学の学科を選ぶとき心理学の学問を選ばせたと思います。」(前橋高校百二十年記念文集より)

(昭和二十二年卒)

地球物理学者

斎藤 尚生

(昭和五〇／一九三〇)

東京生まれ、一九六四年持続性地磁気脈動の研究で日本地球電気磁気学会賞を受賞。地磁気脈動の分類が国際用語として使用される。一九七九年、成層圏観測研究を飛躍的に発展させるリングコア磁力計の開発に成功する。

地磁気脈動の分類が国際用語として使用される。著書に「有翼日輪の謎」「オーロラ・彗星・磁気嵐」等がある。

(昭和二十三年卒)

「お詫びと訂正」

四十六号での誤記をお詫びし、訂正させていただきます。

(誤) 礒部寛太

(正) 礒部寛太

■ 教師群像 ■

内藤 耻叟 初代校長

（明治十四年～明治十六年九月）
文政九年生まれ。群馬県中学校長の後、陸軍教授、東京帝大文科、皇典研究所、斯文学会に歴史、制度典礼を講じた。著書「徳川十五代史」など。「明治十六年のストライキに際し『こうした騒ぎを起こしたこと自体こそ自分の不徳のいたすところだ』といって辞表一本、前橋を立ち去ってしまつた。」（鈴木貫太郎談「名将鈴木貫太郎」所収）

大島 貞益 校長

（明治十七年～明治二十年）
本校（群馬県中学校）校長・明治期の経済学者。但馬国出石藩の洋学者の子に生まれる。英学を修め、維新政府の翻訳業務に従事した後、明治十七年二月、本校第二代校長に就任し明治二十年二月まで在職した。

経済学者としての業績は、マルサスの人口論を日本に紹介し、F・リストの著書の英語版を翻訳し、保護貿易理論を展開した。この学説は体系的経済思想であり欧米経済学の追従を脱却したものとして評価されている。

校長在任中、群馬県会（現県議会）で本校のあり方や存続に関わる重大な問題が議論されていた。なお、小暮校舎正門前での生徒教員の集合写真を見ると、生徒が前を占め最後列に教員が位置し、帽子をかぶった大島校長は教員の列の端の方に写っている。

沢柳 政太郎 校長

（明治二十八年～明治三十年）
本校（群馬県尋常中学校）校長・明治大正期の教育家。

長野県松本の生まれで、帝国大学文科哲学科を卒業。明治二十八年二月、京都の大谷尋常中学校校長から本校校長に就任、二十九歳であった。校風の立て直し、紅雲町旧校舎を新築建て替え、六分校の設置などを実現した。明治三十年四月、仙台の旧制第二高等学校校長へ転出。生徒からの信頼は厚く、翌年の本校卒業生十七人のうち六人が二高へ進学したほどである。

その後一高校長、文部省の局長、明治四十四年東北帝大初代総長、ついで京都帝大総長となり、教授七人を罷免する京大沢柳事件を起こして退任。大正五年私立成城中学校長となり、小学校も創設し自由主義教育運動を推進した。その後、成城学園理事長として活躍した。

津田 左右吉 助教諭

（明治二十九年～明治三十年）
本校歴史担当助教諭・歴史学者。

東京専門学校（早稲田大学）卒業後、沢柳校長の招きで明治二十九年八月から翌年四月まで本校に在職した。その後、千葉中・宇都宮中などで教鞭を取り、大正八年早稲田大学教授となる。東洋思想史・日本古代史を専攻し、記紀の文献的研究を通じて神話が史実でないことを論証した。それ故に、昭和十五年著書『神代史の研究』など四著書が発禁となり、出版元の岩波茂雄とともに、出版法違反で起訴された。ファシズムの嵐の中で学園思想への弾圧事件として有名である。

本校にはわずか八カ月しかいなかった。日記に「つらつら思うに学校も不愉快に堪えず」と書いているように、本校は、あまり居心地がよくなかつたようである。「俸給の少なき……生計を維持するに足らざる」こと、月給は二十五円であった。「最も不愉快なるは受持科目なりけり」、つまり国史・東洋史・西洋史を専門別に分けて担当せず、一人の教師が教授すべきであると考えていた。

桜田 広利 校長

（大正七年～大正十四年）
自由主義的教育 従来禁止されていたスポーツの対外試合の許可、中間試験を止めて期末試験のみを行う、朝礼の方法等々の改正。上級進学指導

に力をいれた。大正末年は前中が目覚しい発展をする出発点になった時期であった。

まつ 下 雅 雄 校長

(大正十四年～昭和十年)

昭和三年には御大典記念行事として自ら指揮しての関西旅行の実施、昭和九年陸軍特別大演習の際天皇陛下をお迎えするため校舎の新築。

大正十四年から学制の改革で軍事教練が正課となり学校は教練査閲の成績を学業成績と同等に重視するようにになった。軍部の力が教育の上にも重くのしかかって来る時代に入る。

軍事教練に対する校長の態度は積極的に協力する立場はとらなかつた。配属将校が公式の席での上席を要求したとき、校長は自分は校長であり学校の責任者である、配属将校は校長の部下ではないが配属されているに過ぎないと要求を退けている。

おおむら 武 男 校長

(昭和二十四年～昭和三十年)

東京帝国大学英文学科卒。英語教諭として昭和八年十二月～十七年六月、校長として昭和二十四年八月～三十年三月。昭和九年十一月十五日、昭和天皇の行幸時に、五年生を相手に英語の天覧授業を行った。昭和十五年に私立前橋夜間中学が国領の小さな製紙工場跡に開設されると、その教頭

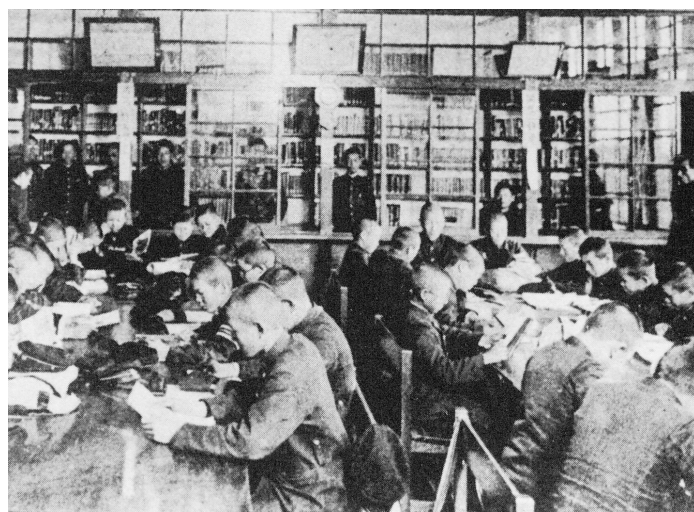
を兼務し、「昼間の勤務の疲れで授業中つい居眠りをする生徒を叱るも、心の中で泣きながら」教鞭を取ったこともある。昭和十六年十一月に湯沢校長が退任したあと数ヶ月間、事務取扱として校務運営に当たった。校長として、敗戦後の混乱期には、東大の新人会で培われた、大正デモクラシーとリベリズムによつて生徒から信頼された。昭和二十七年十二月二十二日の校舎焼失後は、その復興に力を尽くし、昭和三十年一月二十六日開校記念日に行われた復興落成式を終えると、四月には教育委員会指導課長に転出した。校長を慕う生徒は生徒会として、校長留任嘆願の署名を展開し、三月十九日には代表が教育長・人事課長と会見、嘆願書・署名簿を提出したが、諸般の情勢や大村校長の意志を尊重し、運動を取りやめた。毎年、同窓会総会の折りには、体調が許さざり出席、少し長めで有名な挨拶をされた。

のむら 吉之助 校長

(昭和三十年～昭和三十九年)

東京帝国大学国文科卒。国語教師として昭和三年から十年、校長として昭和三十年から三十九年まで。万葉集東歌の研究を意図して前中に赴任。三高で打ち込んだラグビーの魅力が前中生に投影し、保守的な教員の説得に孤軍奮闘し、ようやくラグビー部を創設。ボケットマネーをはたき激励する先生の期待に違わず、創部僅かにして、全国に知られる部となる。校長としては、三十二年に

は創立八十周年を、学校図書の実、学校史の編纂、旧前中跡の標石建立という地味ではあるが重要な事業を行い祝った。また、佐藤春夫、中野重治、三好達治などの文豪を招いて生徒たちを啓発した。三十五年の新安保強行採決の際には、「君たちを大人として遇する。それに相応しい行動をせよ」という入学式の訓辞を貰き、県下の全高校長の反対を押し切つて、生徒有志の対外的な意思表示(デモ)を許可した。



図書室で熱心に図書閲覧する生徒